香美市の中山間地域にある古民家周辺の聖地・葬地の現況

渡辺　菊眞[1*]　**大森　剛志**[2]

(受領日：2016 年 5 月 9 日)

[1] 高知工科大学システム工学群
〒 782–8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

[2] 高知工科大学大学院社会システム工学コース
〒 782–8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

[*] E-mail: watanabe.kikuma@kochi-tech.ac.jp

要約：本稿は、香美市の中山間地域に立地する、空き家となった古民家周辺の山林にある聖地と葬地の現況を明らかにすることを目的としている。聖地は同地の生活を精神的に支えて来た神社や祠、葬地は同地の先祖の霊を祀る墓地を指す。かつて中山間地域においては、家屋とその周辺の山林は密接な関係を築いてきた。山林は資材・食料等の生活資源を提供してくれる場であり、豊かな恵みをもたらしてくれる存在であった。それゆえに山林を畏敬する念が生まれ、神社や祠などの聖地や、墓石を設置する葬地が営まれてきたのである。山林は生活の物質的支えであるとともに精神的支えでもあった。しかし、近年の過疎化に伴い、管理されない森林、耕作放棄農地が増加を続け、山林は荒廃の一途を辿り、同時に聖地、葬地を巡る環境も荒廃しつつある。本稿では里山の再生という目標に向け、対象山林の中に分布する聖地・葬地の現況を明らかにする。精神的支えとしての里山の再生への基礎的考察と位置づける。

1. はじめに

中山間地域において、家屋とその背後にある山林は密接な関係を築いてきた。山林は建築資材や食料など、生活資源の宝庫であり、同地の生活を支え続けてきた。それゆえに、山林を敬い、そこに神社や祠を設け、先祖の霊を祀る墓地が営まれてきたのである。山林は物質的な恵みを与えてくれる存在であるとともに、生活の精神的な支えでもあった。

しかしながら、過疎化が進む現代の中山間地域においては、居住者の移転、生業の変化、それにともなうコミュニティの崩壊など、さまざまな問題が噴出し、同時に山林の様相は大きく変容している。管理されない森林と、耕作放棄地がどんどん増加し、それにともない、その中に営まれて来た神社や祠などの聖地や葬地も荒廃しつつある。本稿の対象地である古民家周辺の山林も、この例に漏れない。

豊かな里山の再生に向けて、植生の再生が必須であることは言うまでもないが、それと同時に生活を精神的に支えて来た、聖地・葬地を整備再生していくことも重要である。

本稿では荒廃した山林の中にある聖地・葬地の分布などの現況を現地調査から明らかにすることを目的とする。

2. 対象地域の概要

対象地域は高知県香美市土佐山田町佐岡中後入（東経 133.71824　北緯 33.64659　標高 159m）にある古民家周辺である。古民家の南側に農地、それを取り囲むように山林がある。山林は広大であるため、民家から標高約 30m～45m 上方（標高約 190m～205m）の範囲を走る、比較的勾配の緩い山道を基準線とし、そこから上下 10m の範囲を対象に調査した。

3. 現地調査の概要

調査は 2016 年 4 月 5 日および 4 月 12 日に実施した。第 1 回目の調査では古民家の北上方にある金峯（かなみね）神社の簡易実測を行った。第 2 回目の

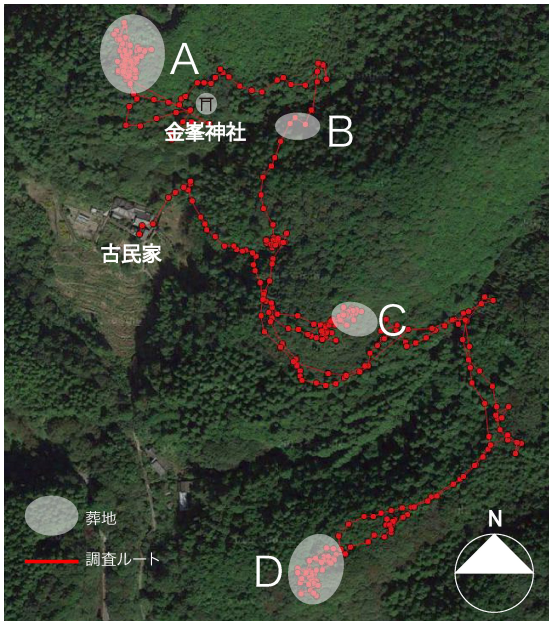

図 1. 対象地域における聖地・葬地の分布

調査では葬地を対象とし、GPS を持ってフィールドワークを行った。墓石が立地する一群を写真撮影し、墓石の配置概略図を野帳に記録し、あわせて墓石に刻まれた氏名および埋葬年も記録した。

4. 聖地・葬地の分布

対象地域における聖地・葬地の分布を図 1[1] に示す。神社（金峯神社）を 1 社、葬地を 4 箇所（A～D）見ることができた。葬地は墓石が群をなして形成するひとまとまりの領域を 1 つの葬地とみなす。金峯神社は標高 190m（古民家立地標高＋ 30m）に位置する。葬地 A は標高 203m～205m、葬地 B は標高 205m、葬地 C は標高 211m、葬地 D は標高 186m～203m に位置し、各葬地は比較的均等な距離を隔てて立地している。

5. 葬地における墓石配置と埋葬年

5.1 墓石配置

葬地 A は大きく上下 2 段の領域により形成される。下段の領域を A1、上段の領域を A2 とする。A1 には 16 の墓石と 1 つの礎石、そして 1 体の地蔵が見られた。これは全て南面している。A2 は 500mm ごとに段差のある 3 段の敷地からなる。ここには 16 の墓石があり、全て南面している（図 2–3）。

葬地 B には 2 基の墓石が倒壊して土に半ば埋もれている。倒壊前にどのように墓石が立っていたかは判断できず、その正面も判断できない。

葬地 C は 4 基の礎石が東西方向に並列して南面している。礎石の上にあった墓標は各礎石の北側

図 2. 領域 A1 における墓石の配置概略図

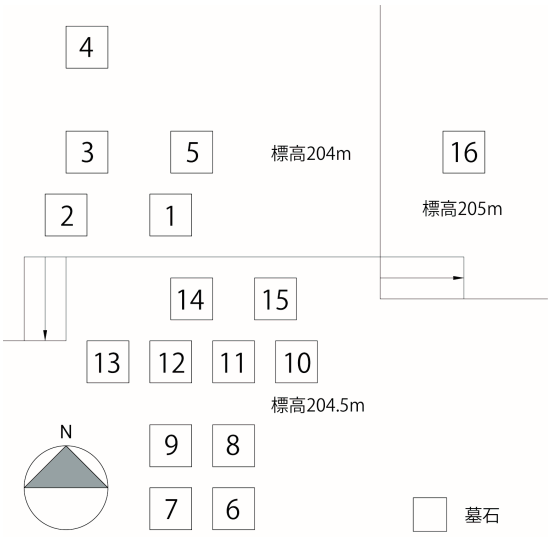

図 3. 領域 A2 における墓石の配置概略図

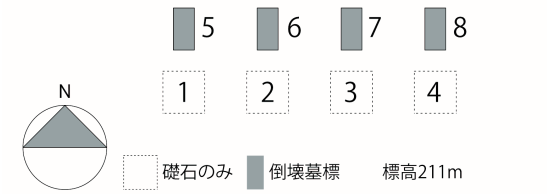

図 4. 領域 C における墓石の配置概略図

に並列して横倒しにされている（図 4）。

葬地 D は南北に走る尾根先端を造成した高台を最上段とし、その下方にさらに 2 段の造成地を持つ。上段、中段、下段をそれぞれ領域 D1、D2、D3 とする。D1 は 4 基の墓石が南面して並列するが、その周辺に倒壊した墓石が散在している。D2 には南面する 6 基の墓石が前後 2 列に並列する一群と、

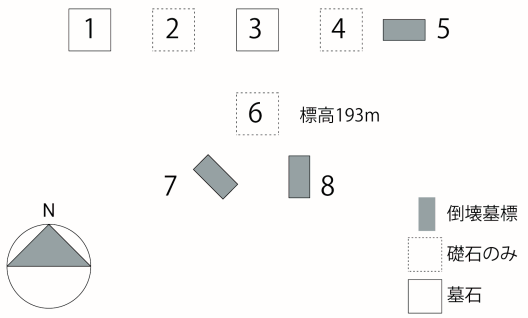

図 5. 領域 D1 における墓石の配置概略図

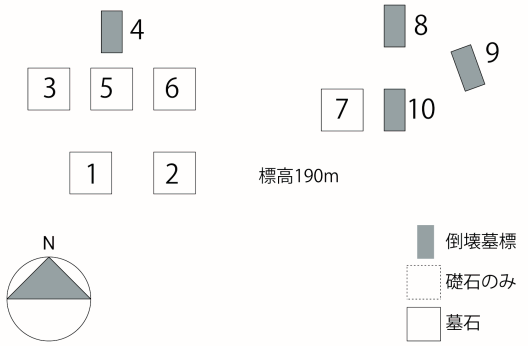

図 6. 領域 D2 における墓石の配置概略図

図 7. 領域 D3 における墓石の配置概略図

その東に 3 基の倒壊墓標群がある。D3 には 7 基の墓石が南面して 1 列に並列し、倒壊墓標はない（図 5–7）。

墓石は、配置が判断できない葬地 B を除き、全て南面していることがわかる。造成地の長軸が東西方向にある場合、または十分な広さを有する場合は、墓石は並列する傾向にある。逆に面積が十分でなく、南北方向に長軸を持つ造成地では、2〜3 の墓石を並列させてそれが、前後に並ぶ。地勢と配置の合理性でなく、南面することの重要性が見て取れる。

5.2 墓標の氏と埋葬年

表 1 に墓標に記された氏名と、その埋葬年を葬送地ごとにまとめた。葬地 A では A、B、C の 3 つの氏が見られた。下段の A1 には江戸時代に埋葬年を持つ墓標が 5 つ見られ、上段の A2 よりも先に営まれた葬地であることがわかる。

表 1. 墓石に刻まれた氏と埋葬年

葬地記号	葬地記号細目	墓石 NO.	氏	建立年（西暦）	備考
A	A1	1	A	明治元年（1868）	
		2	A	明治 22 年（1889）	
		3	A	嘉永 6 年（1853）	
		4			
		5			
		6			
		7	A	文化 2 年（1805）	
		8	A	昭和 27 年（1952）	
		9	A	昭和 5 年（1930）	
		10	A	明治 18 年（1885）	
		11	A	明治 8 年（1875）	
		12	A	宝暦 9 年（1759）	
		13			
		14	B	宝暦 6 年（1756）	
		15			
		16	B	天保 10 年（1839）	
		17			礎石のみ
		a			地蔵
	A2	1	A	大正 5 年（1916）	
		2	A	昭和 10 年（1935）	
		3	A	昭和 10 年（1935）	
		4	C	昭和 62 年（1987）	「C 家の墓」として合祀
		5	A		
		6	A	昭和 21 年（1946）	
		7	A	昭和 24 年（1949）	
		8	A	昭和 8 年（1933）	
		9	A	昭和 20 年（1945）	
		10	C	昭和 19 年（1944）	
		11	C	明治 42 年（1909）	
		12	C	大正 7 年（1918）	
		13	C	昭和 3 年（1928）	
		14	C	大正 7 年（1918）	
		15	C	大正 12 年（1923）	
		16	A	昭和 19 年（1944）	
B	B	1		宝暦 6 年（1756）	倒壊墓標
		2	B	天保 11 年（1840）	倒壊墓標
C	C	1	A		倒壊墓標
		2		大正 12 年（1923）	倒壊墓標
		3	A		倒壊墓標
		4			倒壊墓標
		5	A		礎石のみ
		6			礎石のみ
		7			礎石のみ
		8			礎石のみ
D	D1	1	A		
		2			礎石のみ
		3	A		
		4			礎石のみ
		5	A	弘化 4 年（1847）	倒壊墓標
		6			礎石のみ
		7			倒壊墓標
		8		弘化 3 年（1846）	倒壊墓標
	D2	1	A		
		2	A		
		3	A		
		4		嘉永年間（1848–1853）	倒壊墓標
		5			
		6	A	明治 9 年（1876）	
		7	A	天保 8 年（1837）	
		8		天保 7 年（1835）	倒壊墓標
		9		安政年間（1854–1859）	倒壊墓標
		10			倒壊墓標
	D3	1	A	昭和 32 年（1957）	
		2	A	昭和 31 年（1956）	
		3	A	昭和 21 年（1946）	
		4	A	大正 15 年（1926）	
		5	A	昭和 31 年（1956）	
		6	A	大正 9 年（1920）	
		7	A	大正 7 年（1918）	

葬地 B にある倒壊墓標 2 基はともに江戸時代のものである。そのうちの 1 基は B 氏である。

葬地 C の 4 つの墓標のうち 3 つが A 氏である。倒壊墓標であるため埋葬年を読み取れるのは 1 基しかなく、大正 12 年と刻まれている。

葬地 D において、墓標から読み取れる氏は全て

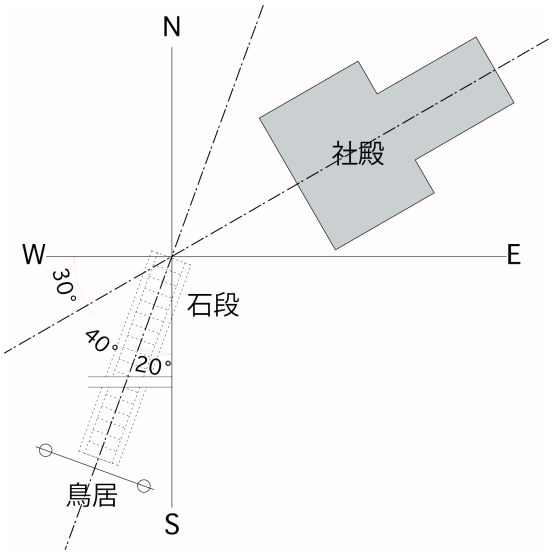

図 8. 金峯神社の社殿と鳥居の方位概略図

A 氏である。D1、D2 ともに江戸時代末期の墓石が数多くみられる。その一方で、最も下段の D3 には昭和中期の比較的新しい墓石が配置されている。

6. 金峯神社の空間

金峯神社は明治の神仏分離以前は、蔵王権現宮と称されていた。その名からも修験道（我が国固有の山岳信仰と仏教との混淆宗教）と関わりが深い神社であったことが読み取れる。当社からは天明 7 年（1787）の棟札の存在が記録されており、そのことから 18 世紀末には社殿があったことがわかる [2,3]。また明治初期には金峯神社（元蔵王権現宮）が当地にあったことが記録 [4] に残されており、それによると社殿と鳥居 1 基があると記され、現神社の構成要素と一致する。

現社殿と鳥居の構成を図 8 に示す。鳥居とそこを起点に社殿まで一直線に続く石段は南北軸から東方向に 20 度傾いている。また社殿の中心軸は西から 30 度南に向く。社殿のある敷地は急斜面を造成した狭小地であり、その地勢に沿って社殿の向きを決めたと推察できるが、修験道とゆかりの深い神社であることを考慮すると、その向きには信仰上の理由があることも考えられる。

社殿は入母屋屋根妻入の拝殿背後に、切妻屋根の本殿覆屋が棟を共有して接続する T 字型平面を持つ。拝殿は正面 2 間、側面 1 間半、覆屋は正面 1 間、側面 1 間半である。覆屋の床は拝殿から 200mm 上げ、後半部分をさらに 200mm 上げて、本殿を据える。床面の上昇により本殿の聖性を強化する設計意図が見て取れる。本殿は一間社春日造の小社である（図 9）。鳥居は鉄筋コンクリート造で柱に昭

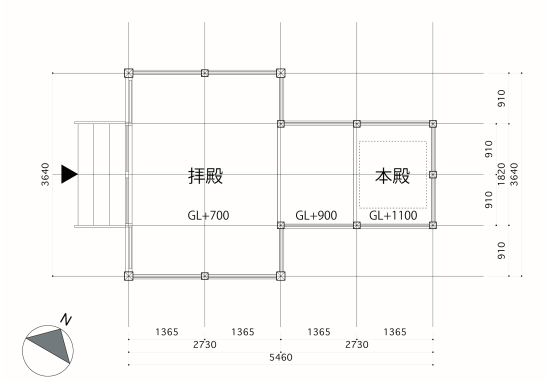

図 9. 金峯神社の社殿平面図

図 10. 傷みの激しい金峯神社社殿と鳥居

和 13 年建立と刻まれている。

現在、拝殿正面左手の柱が根元から折れており、そのため拝殿は左に大きく傾いている。それに伴い正面木階が倒壊、棟木も大きく湾曲しており、建築が倒壊する恐れがある。鳥居も左側の笠木先端が崩落寸前の状態である。社殿の早急の修復ないし解体新設が必要である。

7. まとめ

1. 古民家周辺の山林には 1 つの神社と 4 つの葬地が見られた。4 つの葬地の平面的分布を見ると、それはほぼ均等な距離を隔てて立地していた。
2. 神社は標高 190m、葬地は標高 186m～211m の範囲に立地し、古民家を基準にすると約 30m 上方以上の地に立地し、それ以下には立地しない。
3. 各葬地において、墓石は造成地の形状に関わらず南面していた。祖先の霊が南に向かうように埋葬する意識がはたらいているものと考えられる。
4. 江戸時代にまで遡る埋葬年が刻まれた墓石が群集する葬地が A1、B、D1、D2 の 4 箇所見ら

れた。葬地 A、葬地 D においては、造成地が墓石で充足すると、その上方あるいは下方に新たに造成して棚田状に葬地を営んでいた。大規模な造成をせず、逐次造成を重ねたことがうかがえる。

5. 墓標に刻まれた氏から A、B、C の 3 氏が埋葬されていることがわかった。そのうち、A1 では A 氏と B 氏、A2 で A 氏と C 氏が混在していた。
6. 神社は金峯神社（元蔵王権現宮）といい、社殿は真西から南に 30 度傾き、社殿へ至る石段と鳥居は南北軸から西に 20 度傾く中心軸を有することがわかった。これらは墓石の南向きとは違う方位であり、配置を規定する原理が葬地とは違う可能性があることを示唆している。

以上から、聖地、葬地の双方が居住地（古民家の位置）から上方 30m から 50m の範囲に点在し、その下方あるいは上方には分布しないことがわかる。居住地とその背後に生活の場としての里山があり、その上方を縁取るように聖地と葬地が営まれてきたことが推察できる。また葬地同士は隣接せず、それぞれが比較的均等な距離を保って立地していることや、小規模造成を重ねつつ葬地を増設していることから、森林の伐採と土地の造成を必要最小限おこない、徒に周辺環境を傷つけない配慮が働いていたことがうかがえる。

現在、対象地域には 1 件の古民家（空家）と、その南下方の 1 件しか民家は存在せず、これら葬地を営んだ家を現地調査だけでは特定できない。引き続きヒアリング調査等を実施し、家々と聖地・葬地のより具体的な関わり、さらには家、里山、聖地・葬地の間にみられる連関を明らかにし、魅力ある里山再生への一助としたい。

文献

1) “Google マップ”.（URL=https://www.google.co.jp/maps）
2) 土佐山田町史編纂委員会, “土佐山田町史”, 土佐山田町教育委員会, 1979.
3) 前田和男, “土佐山田町の社寺祠堂”, 土佐山田町教育委員会, 1976.
4) 高知県香美郡土佐山田町役場, “高知県香美郡町村誌　佐岡村”.

Present Situation of the Sacred and Burial Places around an Old Empty House in Hilly and Mountainous Area, Kami City

Kikuma Watanabe[1*] **Tsuyoshi Omori**[2]

(Received: May 9th, 2016)

[1] School of Systems Engineering, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782-8502, JAPAN

[2] Infrastructure Systems Engineering Course, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782-8502, JAPAN

[*] E-mail: watanabe.kikuma@kochi-tech.ac.jp

Abstract: The Objective of this paper is to report the present situation of the sacred and burial places in a hilly and mountainous area, Kami city. In this area, there used to be a good harmony between life of houses and life in forests. Forests were the place which gave us the life resources such as foods and materials. Therefore people in this area had thought that the forests were not only precious places but also sacred places. That would be the reason why the sacred and burial places were set in the forest.

However, recently depopulation has led abandoned forests and agricultural lands. Now forests have been steadily dilapidated.

The authors make the present situation of the burial and sacred space in the forest clear based on field studies.